



## 脳炎ってなに?

どんな  
病気?

脳に炎症が起こり、てんかんやふらつきなどが出る進行性の病気。進行スピードは個体差が大きく、数日で命にかかわるケースも。早期に治療できれば、治療の効果が高いとされ、進行を遅らせることも可能です。

タイプ  
症状

脳炎は、おもに5つの病気があり、  
感染性と非感染性の2つに分類されます。犬で多いのは非感染性です。

### 非感染性タイプ

#### 1 肉芽腫性髄膜脳脊髄炎(GME)

脳のどの部位にでも起こるため、  
炎症が起きた部位によって徴候が異なります。

##### 【発症年齢】

どの年齢でも起こるがとくに中年齢

##### 【おもな徴候】

- ・てんかん発作
- ・目が見えない
- ・徘徊や同じ方向に  
くるくる回るなどの異常行動
- ・頭が傾く、目が揺れる、斜視
- ・顔まわりの痛み  
(顔まわりを触るとキャンと鳴く)など



もっとも  
多い

#### 2 壊死性脳炎(NE)

脳の一部が壊死し、壊死が徐々に広がっていく病気です。

【発症年齢】～4才に多い

【おもな徴候】てんかん発作/徘徊や同じ方向にくるくる回るなどの異常行動/目が見えないなど

#### 3 ステロイド反応性髄膜脊髄炎(SRMA)

脳を包んでいる髄膜や全身の動脈が、炎症を起こす病気です。

【発症年齢】～1才半に多い

【おもな徴候】首の激しい痛み/発熱 など

#### 4 全身性振戦症候群

以前は白い毛の犬に見られる病気だとして、ホワイト・シェーカー・シンドロームと呼ばれたことも。

【発症年齢】子犬からシニア犬まで

【おもな徴候】全身が小刻みに震え続ける など

### 感染性タイプ

#### 5 感染性脳炎

少数派

内耳炎や慢性鼻炎があると、細菌や真菌が内耳、脳に入り脳炎を起こすことがあります。ウイルスや原虫などが原因になることも。(ただし、非感染性に比べるとまれ)

【発症年齢】子犬からシニア犬まで 【おもな徴候】炎症を起こした部位により異なる神経症状

検査  
は?

問診や血液検査、神経学的検査から中枢神経の異常が疑われる場合、CT・MRI検査、脳脊髄液の検査などを加え、総合的に判断します。これらの検査から、脳炎のどの病気なのかを診断します。

治療  
は?

非感染性の脳炎では、まずステロイド製剤を服用し、脳の炎症を鎮めます。ステロイド製剤は長期的使用で副作用が出るため、徐々に減らし、免疫抑制剤を加えてく方法が一般的です。感染性の場合は、感染源の治療を行います。

非感染性の脳炎は、原因不明のケースが多く予防できませんが、感染性脳炎は原因のひとつであるジステンパーウイルスはワクチン接種で予防することができます。また、生活環境を清潔にすることが細菌感染の予防につながりますので、心がけましょう。



いぬに多い病気、そこが知りたい! は「いぬのきもち」で連載中!

●こちらは、掲載した記事を再編集したものです。

アニコム損保ご契約者が  
マイページから定期購読を申込みと

2号(2ヶ月分)無料!!

